



Title	同志として田中仁先生と過ごした貴重な時間を回顧して
Author(s)	許, 衛東
Citation	アジア太平洋論叢. 2024, 26(1), p. 93-96
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95112
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

同志として田中仁先生と過ごした貴重な時間を回顧して

Retrospective of Precious Time with Dr. Hitoshi Tanaka as a Colleague.

許 衛東*
XU Weidong

2023 年 6 月に大阪大学法学研究科の事務局から田中仁先生がお亡くなりになったとの訃報を受け取った時、「青天の霹靂」の一言に尽きます。元旦の日に年賀状付きのメールをもらったばかりで、新年度の国際シンポジウムの開催計画についてお考えを聞く予定でしたから、余計に「人に旦夕（たんせき）の禍福あり」の虚しさに包まれる思いでした。

田中先生とは、私が大阪外国語大学に赴任して以来の長いお付き合い（1994～2020）で、苦楽を共にした思い出が多々あります。いくつか深い思い出についてご紹介します。

I 初対面は大阪外国語大学に赴任する前の面接会

1993 年の夏に日本工業大学で研究員として勤務していたが、大阪外国語大学アジアI講座中国語専攻の「華南経済」担当の講師募集をみて応募することにしました。書類選考を通過して、秋になって面接に来るように事務からの指示が届きました。

元々、私の専門は経済地理なので、主査の先生は環境開発講座の神前進一先生でした。いざ面接会場に引率されると、採用ポストの置かれる華南研究講座の広東語担当の上神先生、中国語専攻語の代表として出席した田中仁先生、アジアI講座の代表として朝鮮植民地経済史専門の小野先生など、錚々たるメンバーが待ち構えていました。

面接の詳細については、だいぶ年数が経って忘れましたが、私の地理的研究の歴史背景について田中先生は一番よく質問してくれました。多分、ご出身の広島大学では地理と歴史は同じ文学部で地理の素養もたくさん身に付けていたからだと思います。

そのなかで田中先生から発せられた「中国歴史研究の事をどう思いますか」の一言が現在も記憶に残ります。

（1）大阪外国語大学の同僚としての思い出（1994～2007）

① 中国語専攻では、後に内部の改組を試み、華南語を含む言語担当と文化担当に二分され、文化系担当教員は昼間主コースと夜間主コースの両方を統一して西村成雄先生（歴史）、田中仁先生（政治）、深尾葉子先生（社会）と私（経済）の 4 人で、さらに歴史×社会、政治×経済の 2 グループに分けて講義とゼミ指導を行うことにしました。政治担当の田中先生とは 1 年生から 4 年生までの講義分担と内容について相談しながら決めるという手順をとりました。特に「東アジアの社会と文化」のリレー講義に関しては、手作りの教材を互いに活用して学生の知的興味の広がりに対応しました。この講義の主旨は現在も私が担当する大阪大学共通教育科目の「経済の世界」で継承しています。

また、修士論文の審査や毎年の院ゼミの夏季合宿も西村先生と田中先生の 3 人で当たりました。

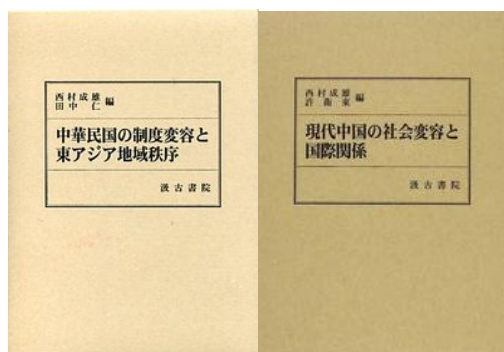
* 大阪大学大学院経済学研究科経営学系専攻・准教授



大学院の修士論文発表会を兼ねた合宿に集まった西村先生、田中先生と私（2000年夏季）

② 入職した 1994 年から田中先生から大阪外国語大学学内研究会のアジア太平洋研究会にお誘い頂き、以後毎回参加するようになりました。実に学際的で刺激的な話しが多く、自身も 2 回ほど発表しました。

③ 2007 年 10 月の阪大統合が決定される直前の配属計画では、西村先生と田中と私の 3 人で人間科学研究科へ移籍し、「地域研究講座」を持つという計画で一旦合意しましたが、途中から当時の大阪大学三成賢次法学研究科長と永谷裕昭経済学研究科長が揃って当時の箕面キャンパスにやってきて田中先生と私に面会し、田中先生に対して法学部新設の「国際公共学科」の中国政治担当として法学研究科へ、そして私に経済学研究科新設の「グローバルマネジメントコース」担当として経済学研究科に来てほしいとの移籍案を提示して、その熱意に負けて田中先生も私もこの提案を受け入れて、結局当初の「地域研究講座」構想は解消しました。西村先生は素直な気持ちのまま統合直後の 10 月に退職を決めましたので、それぞれ西村・田中の編集と西村・許の編集で汲古書院から 2 冊の文集を出版して記念号にしました。



④ 特に深い思い出

(a) 夜中によく電話を掛けてくる田中先生（西村先生はいつも Fax）

発端は 1998 年頃、『現在中国歴史研究通信』（中国現代史研究会の会誌で現在『現代中国研

究』に改名) 編集を担当していた元編集局長の立命館大学金丸裕一先生から立命館アジア太平洋大学の創設業務に追われて編集事務を手放したいとの申し入れがあり、編集委員長の故上原一慶先生(当時、京都大学)と相談して事務局を大阪外国大学に置くことにして田中先生と私が分担することで難局を乗り切ることになりました。後任委員長の故加藤弘之先生(神戸大学)の任期まで計6年間に疾走しました。編集の仕事はとつてもきめ細かく煩雑です。生真面目の田中先生からOKの一言をもらうまでは、24時間戦う体制で臨みました。想いついたらすぐ電話というのは田中先生のポリシーらしく、今になって、夜中に電話の着信音がなったら子供がさかざ「田中先生から電話ですよ」と電話機をとるよう促す幼い声が懐かしく思い出します。

(b) 車の助手席に乗るのが好きでした。

車の免許を持っていない田中先生は車に乗るのが大好きでした。大体大阪外大の研究室で励む『現代中国研究』の編集作業が終わるのはほとんどバスのない夜の11時台で、いつものように私の運転する車の助手席でご自宅のある山田駅の公務員宿舎に帰りました。その後の「アジア太平洋研究会」の合宿の時にも助手席に座って一緒に開催場所に出向きました。1980年代の後半に中国人民大学の李志良教授の所で在外研究した時の見聞や、広島大学の学生時代に受講した地理の授業(北川健次先生や森川洋先生の中心地論)がよく話題になったことは今も鮮明に覚えています。

(c) タバコとビールが大好きでしたが、カラオケは嫌いだったようです。

タバコは後に健康のため2人ともやめました。よく旧箕面校舎のB棟4階の田中研究室で一緒に吸いました。カラオケが嫌いなのは知っていたので、ゼミ生と卒業の祝賀を兼ねて行った時は、いつも伏せて口外しないように注意を払いました。

(3) 大阪大学では、所属は別々になったが、中国文化フォーラムの立ち上げと運営のお陰で、従来の親密な関係を維持しました。

(a) 阪大統合後、田中先生が中心になって各部局にまたがった大阪外国語大学時代の研究メンバーに呼びかけて「中国文化フォーラム」を立ち上げました。中国天津の南開大学と台湾の東華大学と共同で通称「天花板」と呼ばれる「現代中国の社会変動と東アジアの新環境」国際シンポジウムを毎年開催する計画を立てて、2007年の初回シンポジウム(天津)から2019年の台湾シンポジウムまでの計13回に田中先生と私が全て参加しました。中国の社会科学文献出版社から2冊の論文集を出版し、大阪大学出版会からも『共進化する現代中国研究』を上梓しました。

(b) 若手の育成には熱心だったことは、国際シンポジウムの若手セッション設置の提案と指導学生の毎回の成果発表からよくわかります。2007年の南開シンポジウム参加時、当時研究発表をした南開大学学部3年生の鄒燦さんの才覚を一早く見抜いて国費留学生を申請して鄒さんを阪大に呼び、博士まで育てたという教育熱は研究好きに由来する天性そのものです。鄒さんは現在南開大学の日本研究所の教員として活躍しています。

(2) 心の残り

田中先生とは不思議な縁があります。一回東京に出張した時(四谷のホテルに私の恩師の退職記念会があったので、開会前にお茶の水の丸善書店を寄った)、お茶の水駅の洋食レストランで昼食を取るため入店したら、空いている席の隣になんと田中先生がいました。聞けば、当日、東洋文庫の研究会で上京したとのことですが、日程も知らずこの時間帯に同じお店を選んで隣席で食事をする確率はさほど高くないはずで。

なお、2014年の鄭州大学で開催された国際シンポジウムの後、大阪大学 OISSP(国際公共政策学科)の竹内俊隆先生、静岡県立大学の五島文雄先生、田中先生と一緒に私の故郷である中国の海南島を回る予定でした。ご息子の結婚式と日程上衝突したため、結局竹内、五島、私と OISSP の留学生石の4人で敢行しました。

この地域は中国共産党史を研究する田中先生にとって、地方の代表な根拠地の 1 つとして、貴重な素材を揃えています。

是非、もう一度企画して田中先生と訪れたいと思います。

最後に、同志として田中仁先生のご冥福を心から祈ります。